

テーマ: ②教会共同体づくり

+パウロ大塚喜直

1. 福音宣教する教会共同体づくり(京都教区の優先課題)

京都教区の2001年発表の5つの宣教優先課題の①は、共同宣教司牧を推進して、果敢に福音宣教する教会共同体になっていくことです。そして、②から④までの課題は、共同体づくりに関するものです。

②の滞日外国人との連帯と多国籍の教会共同体づくりは、現代の日本教会の重要な課題で、すでに長年の豊かな経験があります。また、③の青少年の育成も、教会共同体が信仰の継承のために果たすべき、これも大切な課題です。そのために、④信徒の生涯養成と信徒の奉仕職も充実させていきます。そして、これに並行して、⑤「社会と共に歩む教会」として、社会の弱者と連帯し、社会の正義と平和の問題に取り組めます。

2. 参加型の教会共同体づくり

京都教区の共同宣教司牧の共同体づくりの基本は、「参加型の共同体づくり」と言えます。従来の司祭主導の「トップ・ダウン」ではなく、教会を構成するすべての人が参加して「ボトム・アップ」の意思決定で、教会運営や活動をすすめていきます。これは、「交わりの教会」という教会の本質からくることであり、信徒、修道者、司祭の交わりと、それぞれの立場の役割補完によって、信仰共同体づくりが行われます。

3. 教会に初めて訪れた人を迎え入れる態勢について

カトリック教会に初めて訪れる人は、さまざまな動機・目的から、キリスト教に対して何らかの期待をもってやって来ます。週日など、教会に相談に来る人、教会に援助を求めて来る人などがあります。

また、主日(日曜日)のミサには、カトリックに関心があつて初めて来る人、旅行者、留学生や技能実習生などの滞在する外国人信徒がいます。各教会(小教区)で、そのような方々に対応することは、福音宣教の面からとても重要だと思います。この課題は決して新しいものではありませんが、教会が常時、外部の人々がアクセスできる態勢を整える必要があります。また、これに関連して、インターネットやスマートフォンを利用した教会情報へのアクセスも有効な手段として活用する時代です。

4. 共同体づくりは宣教である

参加型の共同体づくりで大切なことは、「分かち合い」です。これは、「話し合い」の分かち合いだけではなく、人と人の出会いによって生まれる、広い意味での交流・交わりを意味する「分かち合い」です。同じ信仰のもとに集まり、ともに祈り、交わり、支え合う「信仰共同体」の生きた交わりです。この信仰と生活の分かち合いをすすめることが、宣教となるのです。

使徒言行録 2・42~47 に、聖霊降臨によって誕生した共同体の内容が要約されています。

(ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。)

42節 ⇒ 彼らは、使徒の教え、相互の交わり(コイノニア)、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え、一つにされたのである。

5. 社会とともに歩む教会へ

社会の中に存在する教会は、社会とともに歩み、人々の苦しみを分かち合っていく共同体とならなければなりません。とくに、弱い立場におかれている人々を温かく迎え入れ、互いに奉仕する共同体です。たとえば、病者、高齢者、障がいを持った人、難民や労働で外国から来た人、生活に苦しむ人、差別を受ける人など、わたしたちは、社会に開かれた教会として、福音宣教する共同体を作っていきます。

以上。

1) 17年 山城ブロックだより

神の国のしるし

4月のある日、ある教会で、主日のミサの準備のため内陣に入り会衆席を一瞥すると見慣れない青年たちがいる。ミサの後で話を聞いてみると「ベトナムから来ました」、とのこと。そしてこれは後日分かったことであるが、一つの教区だけでなく山城ブロック全体で起きていることだった。政治や国際情勢の大きな変化が、この地域にも影響を及ぼしている。

聖書を開いてみよう。そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これはキリニウスがシリア州の総督であった時に行われた最初の住民登録である。人々は皆おのおの自分の町へ旅立った（ルカ 2:1-2）。ご存知の通り、もう少しルカ福音書を読み進めていくとこの後、イエス様のご降誕について記されている。聖家族もまた政治や社会情勢の影響を受けたのだ。そしてマタイ福音書に目を移してみると幼子イエス様がヘロデから命を狙われた際、家族でエジプトに逃れたことが記されている。異国にいた聖家族はどうだったのだろうか。もちろんつらい目にも遭っただろう。しかし異国の人々との出会いによって文化や生活習慣の違いを乗り越えた共存、共生の発見があったこと¹だろう。

これまでも山城ブロックにおいて多国籍の教会共同体づくりに取り組んできているが、今年になって新たなチャレンジを受けていると感じている。教会が異国で生活・労働する彼らにとって神様との繋がりを確認し、国籍を超えた友情を経験し憩うことができる場所であるように、これからも皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思う。

2) 「キリスト教小共同体」 p11-12

バチカンのキリスト教一致推進事務局は、世界各地の司教協議会の不安を背景として、「世界におけるセクトあるいは新宗教運動」という文書を1986年に発表した。この文書は、セクトや新宗教運動が勢力を拡大している理由を、正確に解説している。その理由とは、どこかに所属していたいという熱望であったり、共同体意識であったりする。またそれは、答えを求めての探求であったり、文化的アイデンティティの探求であったり、完全さの探求であったり、超越の探求であったりする。さらにそれは、霊的指導を求めていることでもあったり、理想や参加や関わりを求めていることでもあったりする。バチカンの同事務局は、

1 教皇庁 移住・移動者司牧評議会 指針 「移住者へのキリストの愛」 p 3

人々に充足感と親近感を求めさせているのは、今日の世界にはっきりと見られる伝統的な価値観の崩壊や欲求不満の感情、そして足場のない不安感や幻滅感であると言及している。

同文書は、世界各地の司教協議会に送付された質問状から得られた情報を基にして構成されている。こういった状況にどのように対処したらよいかという質問に対して、ほとんどの回答が以下のように提言している。「伝統的な小教区共同体システムの再考。より親密さが感じられ、また人々の生活の状況により適合している共同体的あり方の模索。さらなる基礎共同体。生きた信仰と愛（暖かさ、受容、理解、和解、友情）と希望がある思いやりの共同体。祝う共同体。祈る共同体。宣教する共同体。外向的で証しをする共同体。離婚した人や再婚した人、また疎外された人といった、特別な問題を持つ人を受け入れ、支援しようとする共同体。」

教会憲章 1条

教会はキリストにおけるいわば秘跡すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり、道具である